

学校内適応指導教室における共同芸術療法の試み

日 高 なぎさ

Practice-based Research on Collaborative Art Therapy for Students Attending Adaptation Assistance Classes in Junior High School

HIDAKA Nagisa

Abstract

The rate of school absenteeism remains high, posing a significant challenge for Japanese educators. Problems related to “relationships with friends” have been pointed out as a leading cause of absenteeism. Through various efforts at “*Kokoro no Kyoushitsu*”, a simplified, yet more family-oriented version of adaptation assistance classes within the junior high school, for students who were unable, or refused, to attend regular classes, I provided opportunities to interact with other non-attending students, helped them develop friendships, and offered psychological support. As part of my efforts to promote interactions among these students, I held art therapy sessions where they created collaborative collages.

In this study, I aimed to identify therapeutic effects and changes in the students. The findings revealed that factors such as “cathartic effects”, “deepening of personal relationships through collaborative activities”, and “sense of achievement attained through visual perception” contributed to the effectiveness of art therapy.

Keywords : school absenteeism, adaptation assistance classes at junior high school, relationships with friends, art therapy, collaborative collage, collaborative work, social bond

要 約

不登校は近年でも依然として多く存在し、我が国の教育現場では深刻な問題である。

従来から不登校のきっかけとしては「友人関係」をめぐる問題が指摘されており、筆者は数年前から校内の「心の教室」において、不登校生徒間で交流する機会を設けて、不登校同士の友人関係の形成を図ったり、心理的サポートを行っている。

平成24年10月1日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科専任講師

本研究では、不登校生徒間の交流を深める一環として、共同コラージュ（貼り絵）などの芸術療法を共同で実施し、不登校生徒の変化や効果について検討した。

その結果、「カタルシス効果」「共同作業による人間関係の深まり」「視覚情報によってもたらされる達成感」などの要因が奏効理由として明らかになった。

キーワード：不登校，学校内適応指導教室，友人関係，芸術療法，共同コラージュ，共同制作作品，社会的絆

I. はじめに

1950年代後半に症例が報告されて以来、我が国では年々、不登校が増加傾向にある。平成23年度学校基本調査¹⁾では、平成22年度に不登校で学校を30日以上欠席した児童生徒は小学生が22,463人、中学生が97,255人も存在し、現在も日本の教育現場における深刻な問題である。

2001年に報告された現代教育研究会の調査によると、不登校体験者が不登校のきっかけとして挙げた要因の中で最も多いものは「友人関係をめぐる問題（45.0%）」であり、不登校生徒にとって同年代の友人との関係が重要であることがわかる²⁾。また中学生の不登校の抑制要因を研究した筆者³⁾の研究でも、不登校抑制要因として「情緒的サポート」が有効とわかり、特に「友人」からの情緒的サポートを挙げた者が最も多かった。また一度も登校を渋らなかつた者5名の回答を検討すると、「友達に会えるから（登校するようになった）」「学校に行かないと友達に会えないから」など5名中5名が「友人との関係」を挙げている。このことから友人との良好な関係が、中学生の不登校を未然に防止すると同時に抑制すると考えられる。

そこで筆者は数年前から学校の協力を得て家庭から距離の近い学内の特別教室である「心の教室」を簡易型の「学校内適応指導教室」とし、不登校支援協力員や学生ボランティア等の人的資源を有効に利用しながら、不登校生徒間の交流を増やし、不登校生徒同士で良好な人間関係を築かせ、友達という横のつながりを作り、友人関係において自信をつける取り組みを行っている。

本報では、その取り組みの一環として学校内適応指導教室で実施した共同コラージュなどの芸術療法の効果について報告する。

1) 文部科学省 『平成23年度学校基本調査』 2012年。

2) 現代教育研究会 『不登校に関する実態調査－平成5年度不登校生徒追跡調査報告書』 文部科学省 2001年。

3) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究（第2報）－不登校にならなかった要因について－」 『関西大学心理相談室紀要』 第4号 2003年 75-82頁。

Ⅱ. 学校内適応指導教室について

学校内適応指導教室とは、筆者が学校の協力を得て実施している学校内での取り組みの場である。

各市に設置されている公的機関である「適応指導教室」では、不登校生徒の個別カウンセリングや保護者のカウンセリングだけでなく、集団心理療法や芸術療法、作業療法、園芸療法など様々な心理療法の技法を採用して、不登校生徒に様々な体験活動を実施させており、不登校生徒の心理的な成長に効果を上げている⁴⁾。

公的機関である「適応指導教室」は不登校生徒の援助に非常に有効ではあるが、市内に1箇所もしくは数箇所しか設置されていない場合が多く、不登校生徒の中には距離が遠方であることから家庭から自転車やバスなどを利用しなければ通えない生徒も多い。

現在の大阪府下の公立中学校には、名称は学校によって異なるが、不登校生徒やその他、心理的な問題を有する生徒が利用できる特別教室（今回の対象校では「心の教室」と命名）が設置されており、スクールカウンセラー（以下、SC）や教職員が利用している。

そこで家庭から距離の近い学内の上記の「心の教室」のような特別教室を簡易型の「学校内適応指導教室」として活用し、不登校生徒の個別カウンセリングや保護者のカウンセリングだけでなく、「適応指導教室」の様に集団療法や遊戯療法などを取り入れて活動内容の自由度を広げ、不登校生徒の支援をより円滑に行おうとするのが筆者が着手している「学校内適応指導教室」（以下、本論文では対象校での名称である「心の教室」とする）の取り組みである。

本取り組みでは、筆者はSCとして週1日勤務したが、週1日のSCの勤務だけでは不登校生徒の援助には不十分であることから、今回の協力校に導入されていた不登校支援協力員（不登校支援協力員は週4～5日、中学校に勤務して、不登校生徒の家庭訪問を行ったり、別室対応をしたりする支援者である）にも協力を要請し、連携を取りながら援助を行った。

本教室では、不登校生徒や保護者のカウンセリングを行うだけでなく、卓球やゲーム、芸術療法にも繋がる工作などの集団活動を用いて生徒の心理的成長を図るスラヴソンの活動性集団心理療法⁵⁾の理論を採用した活動を行った。スラヴソンの集団心理療法は、特に

4) 福岡市教育センター教育相談室編 『体験活動を重視した適応指導教室の実践的研究：不登校に関する実践研究』 1999年 5頁。

5) Slavson, S. R. An introduction to group therapy. New York: The Commonwealth Fund and Harvard University Press, 1943 (S. R. スラヴソン 小川太郎・山根清道 (訳) 『集団心理療法入門』 誠信書房 1956年 180-189頁)。

十代の少年に適した方法であり、このような集団活動での人との交流を通して、子どもたちはカタルシスや自我の強化、現実吟味力を高めることができ、自分で考えたことを実際に行動化できるようになるという治療効果がある⁶⁾。

さらに思春期の生徒の遊戯療法には適度な運動がカタルシス効果をもたらし、有効である⁷⁾ことから、バトミントンや卓球、ストレッチなどの身体を使った運動も積極的に取り入れている。

先述したとおり、不登校生徒の多くは「友人関係」のつまづきから不登校状態に陥っている者が多く、このような集団活動や芸術療法を通して友人関係のスキルを学び、友人関係での自信を取り戻すことができれば、再登校や教室復帰につながるのではないかと考え、本取り組みを実施した。

Ⅲ. 芸術療法について

芸術療法とは、こころの奥底にあるものを何らかの形で表現したいという、人間が生来的に持つ欲求を基礎とした治療法である⁸⁾。その種類は実に多彩であり、絵画、コラージュのような視覚アートのみならず、ダンス、発声、音楽、ドラマ、詩や文章の製作など様々な媒体を用いて自己を表現することによって、心身の解放、癒し、自己の可能性への信頼、創造性の開花などを目指すものである⁹⁾。

Ⅳ. コラージュについて

「コラージュ (collage)」とは、coller (糊づけする) という語源からなるフランス語「糊による貼りつけ」を意味し、20世紀初頭にピカソらによって導入された美術表現の一手法である。「コラージュ療法」は個人が画用紙に自分の気に入った雑誌やパンフレットの絵や写真、文字などを切り抜いて貼り付けて作品を作成する芸術療法の一種であり、1980年代後半から用いられるようになった。

6) 霜田静志・北見芳雄・篠崎忠男 『集団分析：人間育成のための集団療法』 誠信書房 1963年 19-20頁 28-29頁。

7) Ginott, H. Group psychotherapy with children. New York: McGraw-Hill, 1961 (H. ジノット 中村悦子訳 『児童集団心理療法』 新書館 1965年 94-99頁)。

8) 星野良一 『補完・代替医療 芸術療法』 金芳堂 2006年 1-2頁。

9) 安原青兒 『福祉のための芸術療法の考え方—絵画療法を中心に—』 大学教育出版 2006年 15-29頁。

本来の「コラージュ療法」では一枚の作品を一人が作成することが基本であり、切り抜きについては、クライアントが雑誌や広告を見て、自分で選択したものを切り抜いて構成するマガジン・ピクチャー法（主に森谷らが採用している）と、治療者があらかじめ雑誌や広告などから切り抜いた素材を箱などに準備しておき、その素材の中からクライアントが好きな素材を選び出して貼り付けるコラージュ・ボックス法（主に杉浦らが採用している）がある。

素材の選び方による実施方法の違いだけでなく、治療者とクライアントが同時に作品を製作する「相互法（同時制作法）」や、家で子どもに作品を作らせる「宿題法（自主制作法）」、またグループでコラージュを製作することで、コラージュを集団絵画療法として用いたり、自己啓発技法として用いたり、リハビリテーション分野で用いるなど様々な実施方法が模索されており、治療効果が研究されている¹⁰⁾

コラージュ療法の効果としては、素材を「選び、切り、貼る」という単純な手続きであることから、箱庭などの他の技法に比べて場所の制約が少ないこと、また表現能力が未熟な子どもや認知症の老人など、イメージを適切に表現できにくい対象では、コラージュを用いることで容易に自己表現ができるという利点もある¹¹⁾。さらに雑誌をハサミで切り抜くことによるカタルシスや糊で貼り付けるカタルシス効果などが報告されている。

V. 方法

(1) 対象者

調査協力の得られたZ中学校の「心の教室」に通う不登校生徒9名（男子3名、女子6名）である。ただし、男子1名はほとんど登校できない状況であることから、分担箇所を家庭訪問時に渡し、SCと不登校支援者とで後日回収するという形をとった。

なお、本取り組みの研究論文への掲載については、プライバシーを保護することを条件に、当時の学校長より許可を得ている。

(2) 実施期間

200X年9月上旬～10月末の文化祭開催日まで。

10) 森谷寛之、杉浦京子他編 『コラージュ療法入門』 創元社 2004年 5-15頁。

11) 星野良一 『補完・代替医療 芸術療法』 金芳堂 2006年 70-71頁。

(3) 実施方法

B 4サイズ程度の白紙の画用紙を畳約1畳程度の大きさに並べ、全体の作品の構図を不登校生徒及び不登校支援協力員、SC（筆者）が協力して描いた。

その後、画用紙を元のB 4サイズに分割し、各自、担当箇所を決め、登校できる不登校生徒は学内の「心の教室」で製作し、登校できない不登校生徒は自宅にて担当箇所を作成させた。完成後、それらを持ち寄り、再び畳約1畳程度の大きさに貼り合わせて完成させた。

今回は不登校生徒同士の交流を深めるために、個人が一作品を作成するのではなく、大きな模造紙に共同で製作させた。また従来雑誌の切り抜きを利用するコラージュを用いると、作品のまとまりや生徒同士の達成感や一体感が生まれにくいのではないかと考え、今回は元来のコラージュ療法のような雑誌や写真の切り抜きは用いず、折り紙や布はく紙などを用いた美術技法に近い形のコラージュとして製作に取り組ませた。

また後半では不登校生徒の自発的な提案を尊重し、コラージュ技法だけでなく、葉に色を付けてそれをスタンプの様に利用したり、指を筆代わりに用いて描くフィンガー・ペインティングなども利用し、技法に自由度を持たせた。

VI. 結果

以下、作成過程における不登校生徒の変化について「初期」「中期」「後期」の3期に分けて報告する。

《作成過程の変化》

【初期】（X年8月末～9月上旬）

2学期中旬に開催される「文化祭」に向けて、不登校生徒の通う「心の教室」でも何か協力して出し物をしようと提案し、9月上旬から協議をし、共同コラージュで作品を製作し、展示をすることとなった。テーマについて、メンバーで意見を出し合い、どのメンバーにもわかりやすく取り組みやすいこと、また季節感がでて美しい表現ができることから「四季」をテーマにすることに決定した。

9月半ばより製作を始めるが、夏休みの影響により昼夜逆転している不登校生徒が多く、製作開始当初は9名程度いる「心の教室」の不登校メンバーも1日あたり1～2名の生徒しか登校しないことから製作がなかなか進まず、文化祭での披露が危ぶまれた。

作品の下絵については、「○○ちゃんが絵が上手だから下絵を描いたら？」と、ある不

登校生徒が提案したことから、不登校生徒の中でイラストが得意な生徒と不登校支援協力員、筆者が協力して下絵を描いた。

【中期】（X年9月中旬～9月下旬）

下絵を描いた後に元のB4サイズの大きさに分割した画用紙を、不登校支援協力員と筆者が持参して昼夜逆転によって欠席していた不登校生徒の家へ家庭訪問をした。その際に文化祭での試みを彼らに伝えて協力を要請したところ、欠席していた不登校生徒も興味を示して「心の教室」に徐々に登校し始めて製作に協力し、元の生活リズムを少しずつ取り戻し始めた。

最初に製作し始めたのは春の「桜」である。桜の淡く優しい色合いを表現すること、また手触りもよく不登校生徒の心理的カタルシスにも役立つのではないかとのことから、淡いピンクの布はく紙を濃度を変えて数種類準備し、それを桜の花びらに見立てて切り、貼り付けることとなった。桜の製作時は、作品の優しい雰囲気や美しさから、不登校生徒も意気揚揚と作成し、作品は比較的短期間で完成した（図1）。

次に着手したのは夏の「向日葵」である。向日葵は、桜と変化をつけること、糊で貼るなどの触感を利用して心理的退行を促し不登校生徒の交流をさらに増やすこと、さらに「頑張れば素晴らしい作品ができあがる」ということを実感させることを目的に、桜よりも労力を必要とする、ちぎり絵の技法を用いて製作を試みた。

向日葵は図2からもわかるように、折り紙を小さくちぎってそれを画用紙に貼り付けるという細かい作業を要する作品であったことから、不登校生徒の多くが「気が遠くなる～」 「しんどい！」 「まだまだ終わらない～」と製作途中で弱音を吐いていた。しかし、小さくちぎった折り紙が些細な動作で飛んでいったり、糊で手がベトベトになったりと、様々なハプニングが続出したことから、生徒達の弱音は次第に笑いに変化していき、時間はかかったものの素晴らしい作品ができあがった。

中期の生徒の変化をまとめると、当初は初めて顔を合わす生徒もいたことからあまり交流が見られなかったが、花びらを切ったり、折り紙をちぎったり、コラージュのパーツを作ってお互いに渡しあったり、糊やハサミを渡しあったりするうちに、次第に打ち解けるようになり、メンバー同士の会話も増えて、和気藹々とした雰囲気になっていった。

【後期】（X年10月上旬～10月末の文化祭開催日まで）

秋の製作の際には、夏の「向日葵」でかなり労力を要したせいか、少し楽をして作品を製作したいという気持ちが生徒にも芽生えたようであった。不登校生徒の1人が「本当の

紅葉を使って、「紅葉を描いてみたら？」とコラージュとは異なる新しい製作手段を自ら提案した。その提案に対して「心の教室」のメンバーで相談したところ、メンバー皆が「面白そう!」「やってみよう!」と賛成したことから、紅葉の葉をスタンプ代わりにして作品を製作するという技法を用いた(図3)。

同じ色の紅葉だけでは変化がないことから、生徒同士が工夫し、黄色の葉を主に担当する生徒、赤色の葉を主に担当する生徒、その中間の色の葉を担当する生徒など、主に担当



図1 春の作品(桜)



図2 夏の作品(向日葵)



図3 秋の作品(紅葉)



図4 冬の作品(冬木立)



図5 完成した共同コラージュ作品

学校内適応指導教室における共同芸術療法の試み（日高なぎさ）

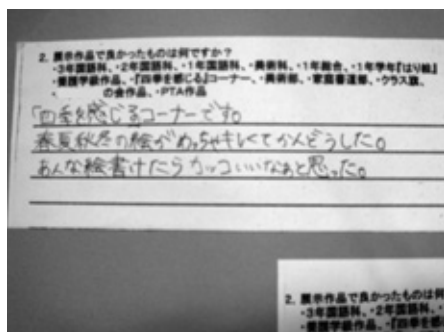


図6 一般生徒の感想①

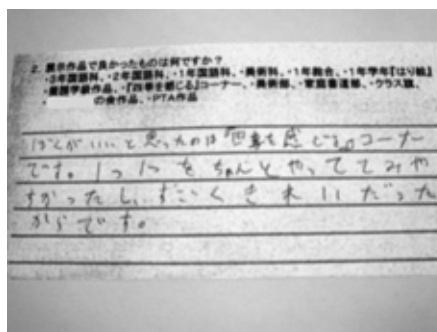


図7 一般生徒の感想②

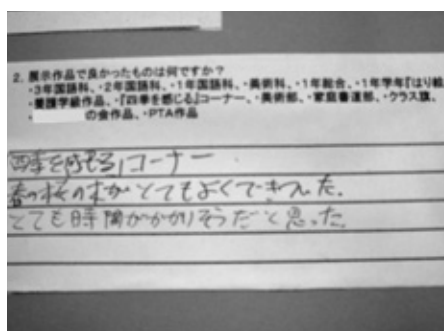


図8 一般生徒の感想③

する色をいくつか決めて、色が混ざらないように注意しながら順番に紅葉の葉に絵の具を塗って、スタンプの様に押して行った。

さらに冬の製作の際にもメンバー同士で「今度はまた違う方法で作ってみよう！」との意見が出され、指を筆代わりにして描くフィンガー・ペインティング技法を用いて指で冬木立の樹皮を表現し、その後、雪を表すために綿を貼り付けることとなった（図4）。

絵の具を指につけると「幼稚園の時を思い出す」など、生徒達も童心に返った様で、はしゃぎながら樹皮を交互に描いていった。中には童心に返りすぎて、製作用紙だけでは物足りず、余った用紙にベタベタと指で樹皮の模様を描き続けていた生徒もいた。

このように製作後期になると、メンバー同士の交流も盛んになり、創造性が開花したのかコラージュ技法以外の製作アイデアを生徒達自らが提案し始め、製作も進み、無事に四季の4作品が完成した（図5）。

文化祭の開催時期にも無事に間に合い、当日は一般生徒にも披露され、文化祭の感想でも高評価を得ることができ、不登校生徒も喜んでいた（図6～8）。

《不登校生徒の感想》

以下に「心の教室」の不登校生徒の感想例を挙げる。

- ・のりで貼ったり，はさみで切ったりするのが面白かった。
- ・幼稚園児に戻ったみたいで楽しかった。
- ・みんなで作っておもしろかった。
- ・今まで話したことのない子とも話せてよかった。
- ・最初はバラバラで何を作っているのかわからなかったけど，最後に全部を貼り付けて全体を見たら，すごくきれいで感動した。
- ・ひまわりがしんどかったけど，できあがったらうれしかった。
- ・しんどかったけど，おもしろかった。完成してうれしい。
- ・上の（教室にいる）子にも見てもらえて，ほめてもらえてうれしかった。

VII. 考察

以下に本試みの奏効要因について考察する。

① 心理的退行によるカタルシス効果

星野は芸術療法の特徴として「芸術療法にはnon verbal（非言語的）な手法を用いるという特徴があり，意識下に抑圧された様々な不安や葛藤が表現されることがあるため，表現行為そのものがカタルシス効果を持つ」と述べている¹²⁾。さらに上述した通り，本来のコラージュ療法においてもハサミで「切る」，糊で「貼る」という行為がもたらすカタルシス効果はストレスの軽減に有効である。

また杉浦¹³⁾は，コラージュの研修会に参加した心理臨床家61名に「初めてコラージュを作った感想」および「作成した経験から，どのような治療効果があると思われるか」といったコラージュの治療的要因を記述調査したところ，その一つの要因として「結構楽しくすぐ時間がたった」「面白かった，クリエイティブな気分になれた」「童心に戻った感じで，楽しかった」などの「心理的退行」が挙げられたと報告している。

コラージュによって心理的退行が生じた理由として，杉浦は通常のコラージュの場合，「雑誌やカタログの中から好きなものを選び出す過程，それをハサミで切る，あるいは手

12) 星野良一 『補完・代替医療 芸術療法』 金芳堂 2006年 1-2頁。

13) 杉浦京子 『コラージュ療法』 川島書店 2005年 27-31頁。

でちぎる行為、台紙の上に乗せ位置をあれこれ考える。それをのりで貼るなどのコラージュ・アクティビティにより、心理的退行が行われたと考えられる。これは遊び的な感覚が生じているとも言えられよう¹⁴⁾と述べている。

今回の不登校生徒においても「のりで貼ったり、はさみで切ったりするのが面白かった」「幼稚園児に戻ったみたいで楽しかった」という意見があり、また作品制作中の生徒達の楽しそうな様子や会話量の増加から考えても、これらの芸術療法的手法が心理的退行を促し、楽しい気分をもたらし、彼らのストレスの軽減に有効に働いたものと考えられる。

今回のような共同コラージュの場合、通常のコラージュと異なり、個別製作ではなく共同製作であること、また不登校生徒達の心理的混乱を防ぐことを考慮してあらかじめテーマや実施内容を決めていることから、雑誌から素材を選び出すという作業はない。その結果、通常のコラージュで見られる「自己表出（気持ちの解放）」や洞察、自分の無意識に漠然としていた考えが徐々に明らかになる「内面の意識化」という効果は期待できないと考えられる。

しかし、各自の不登校生徒はそれぞれ自分の問題を抱えていることから、コラージュなどの作品を通して集団の場で彼らの問題を明らかにすることは、心理的混乱を招く危険性もある。そのため、不登校生徒同士の交流を深めたり、コミュニケーション能力を高めることを目的とする場合は、今回のようにテーマや実施内容をあらかじめ決めて「枠」を設定した実施方法でもよいのではないかと考えられる。

このような「枠」を設定した状況であっても、不登校生徒の感想や生徒の変化をみると、コラージュによる心理的カタルシス効果は十分に得られていると思われる。

また後期にみられたフィンガー・ペインティング技法の効果について、安原¹⁵⁾は、「日頃抑制されやすい身体探索の欲求が満たされたり、汚したいという欲求の満足、発散、開放感などカタルシス効果という点において、フィンガー・ペインティングの役割は決してちいさくない」と述べている。フィンガー・ペインティングの治療的意味として安原は「触覚への新たな刺激、そのことによる自己への気付き、描画中の集中、汚すことの快感、発散、身体的欲求の解放などであろう¹⁶⁾」と述べている。

情報化社会や外遊びの減少など、近年は子ども達は人と人との交流したり、自然と接触したりすることが少なくなり、本来人間に備わっている五感を活用する機会が減少してい

14) 杉浦京子 『コラージュ療法』 川島書店 2005年 27-31頁。

15) 安原青児 『福祉のための芸術療法の考え方—絵画療法を中心に—』 大学教育出版 2006年 96-108頁。

16) 安原青児 『福祉のための芸術療法の考え方—絵画療法を中心に—』 大学教育出版 2006年 96-108頁。

る。子どもの発達において、母親とのスキンシップや他者との交流など、五感を活用することは極めて重要な要因である。ストレスを抱えた不登校生徒達にとって、このように五感を活用する芸術療法的手法は彼らの欲求の解放につながり、有効であると考えられる。

ただ、フィンガー・ペインティングについては、かなり心理的退行を促す効果が高いことから、セラピストや援助者などの大人が必ず中に入りつつ、生徒の行動を見守ることも重要と考えられる。

② 共同作業による人間関係の深まり

製作過程の変化からみても、本取り組みによって不登校生徒間での会話や交流が増していることがわかる。後期になる頃には、実際の紅葉をスタンプ代わりにして製作したり、フィンガー・ペインティング技法を用いて製作したりするなど、製作技法に自由度が生まれ、集団での創造性が活性化されて創作意欲が増しており、集団凝集性も高まっている。

さらに不登校生徒の感想においても「みんなで作っておもしろかった」「今まで話したことのない子とも話せてよかった」という意見がみられ、共同制作によって生徒同士の交流を楽しめたり、新たな交流が生まれたりしたことがわかる。

先述した杉浦¹⁷⁾によると、コラージュには「実際にはThとClが同時に各々の作品を作る相互法（同時制作法）や母と子が一緒に作る母子相互法などが実施されている。作品を媒介として、また同じ時間を共有することでThとClや母と子あるいはその三者のコミュニケーションがスムーズに行われるようになる」と報告されており、「ラポール・相互作用・コミュニケーションの媒介」として通常のコラージュは役立つと述べられている。

また星野も「言語的コミュニケーションが困難な場合に、芸術療法を通じてコミュニケーションを持つことが可能である」¹⁸⁾とし、芸術療法のもたらすコミュニケーション能力の活性化についても述べている。

犯罪原因論の中にハーシー（T. Hirschi）のボンド理論（social bond theory）¹⁹⁾がある。ハーシーによると、人には家族や集団、他者など社会と結び付けられている「社会的な絆」があり、この絆が強い場合は逸脱行動が抑制され、弱くなった場合に逸脱に走るというものである。森田²⁰⁾は不登校現象をこれに当てはめて「生徒と学校社会との社会的絆が強け

17) 杉浦京子 『コラージュ療法』 川島書店 2005年 27-31頁。

18) 星野良一 『補完・代替医療 芸術療法』 金芳堂 2006年 1-2頁。

19) Hirschi, T. Causes of Delinquency, University of California Press, 1969 (T. ハーシー 森田洋司・清水新二（監訳）『非行の原因：家庭・学校・社会へのつながりを求めて』 文化書房博文社 1995年 29-48頁。

20) 森田洋司 『『不登校』現象の社会学』 学文社 2005年 238-248頁。

れば、子ども達は学校生活に強く引き付けられ登校行動は確保されることになる」と述べ、不登校行動は、裏返せば不登校生徒と一般生徒や教職員といった学校社会との社会的絆の弱まりによって発生すると述べている。

また森田は友人関係や教師との関係など、子ども達が不登校に陥る原因の中でも学校内の人間関係が大きな比重を占め、不登校行動を強く規定しているとも述べている²¹⁾。同様に筆者の研究²²⁾においても、中学生時代に登校を渋る原因として「人間関係」が最も多く回答されており、不登校生徒にとって友人関係が極めて重要であることがわかる。

友人関係でつまづいた不登校生徒達が、芸術療法や共同コラージュでの糊やハサミの貸し借り、楽しい雰囲気での会話などを通して、コミュニケーションスキルを学習し、友人関係において自信を持つことができれば、さらに彼らの自己効力感を高めることができる。また不登校生同士で友人関係が形成されれば、学校や友人とより強固な「社会的絆」が形成され、登校行為が促される可能性が高い。そのような点においても、このような芸術療法的手法を取り入れた共同製作は有意義であると考えられる。

③ 視覚情報によってもたらされる達成感

人間は外部情報の86%を視覚情報から入手しているといわれており²³⁾、視覚情報からの影響は極めて大きい。不登校生徒達にとって協力して完成した素晴らしい共同コラージュや共同制作作品を見た際に与えられる心理的影響は大きく、彼らの自信や自己効力感に繋がったものと考えられる。このことは不登校生徒が「最初はバラバラで何を作っているのかわからなかったけど、最後に全部を貼り付けて全体を見たら、すごくきれいで感動した」「ひまわりがしんどかったけど、できあがったらうれしかった」「しんどかったけど、おもしろかった。完成してうれしい」と述べていることからもうかがえる。

不登校生徒は友人関係での躓きや学習不振、家庭での問題など、様々なストレスによって自信を喪失している者が多い。そんな彼らが完成した作品を見ることで「一生懸命頑張れば、こんな素晴らしい作品ができるんだ」という達成感を完成した時に抱くことができるという点は、彼らの心に肯定的な影響を与えて、自己効力感を高めていると考えられる。

杉浦は²⁴⁾ コラージュによる効果として「自己表現と美意識の満足感」を挙げており、「自分の内面にあるものを表現できた喜びやバランスの取れた作品ができた時の喜びは、自己

21) 森田洋司 「『不登校』現象の社会学」 学文社 2005年 238-248頁。

22) 日高なぎさ「健常者を対象にした不登校の研究（第1報）—登校を渋った経験，時期および原因について—」『関西大学心理相談室紀要』第3号 2002年 61-70頁。

23) 永田泰弘・三ツ塚由貴子著 『よくわかる色彩の科学』 ナツメ社 2007年 34-35頁。

24) 杉浦京子 『コラージュ療法』 川島書店 2005年 27-31頁。

表現と美意識の満足感である」と述べている。先述の杉浦による受講者の調査でも「達成感、満足感」「何かを始めて終わった（完成した）という心の変化の経験は混乱、葛藤をいい方向へと向かわず疑似体験になると思う」と報告されており、完成作品を見ることで達成感や満足感を味わえることがわかる。

また非行臨床におけるコラージュ療法の魅力として藤掛も「美的満足感と負担のない自己表現」²⁵⁾を挙げており、コラージュでは絵画が不得手な者であっても既にある素材を貼り付けて制作するため、美的満足感を味わえ、それなりに見栄えのよい作品ができあがると報告している。

本試みにおいても、不登校生徒達は各自の絵画能力の得手不得手に関わらず制作に取り組むことができ、共同で努力し、完成した作品を見ることで視覚的にもたらされる達成感・満足感を得ることができており、彼らの自己効力感や自信を高め、有効に働いたものと考えられる。

④ 一般生徒からの評価による自信

今回は不登校生徒の希望を聞き、一般生徒に作品を公開したが、図6～8にみられるように一般生徒からも「春夏秋冬の絵がめっちゃキレくて感動した」「春の桜の木がとてもよくできていた」「1つ1つちゃんとやってみやすかったし、すごくきれいだったからです」と高い評価を得ている。また不登校生徒においても「上の（通常の教室にいる）子にも見てもらえて、ほめてもらえてうれしかった」という意見もある。

不登校生徒の多くは「心の教室」など学内の特別教室に通っており、一般生徒の目を避けて登校している場合が多い。しかしこのように不登校生徒も頑張って学校に通っていて、学校生活を送っているのだということを、作品を通して一般の生徒に理解してもらえたことも、不登校生徒の自信につながると考えられる。

またこれは逆に、一般生徒が彼らの存在を認めることにもつながり、一般生徒から不登校生徒になげかけられる「学校をさぼっている」という冷やかな視線や否定的な評価を軽減する一助にもなるであろう。

このように、「心の教室」など学内の適応指導教室において、実施できる取り組みの内容を拡大させ、保護者や本人のカウンセリングだけでなく適応指導教室で行われているような集団でのアプローチや芸術療法的手法を積極的に取り入れることは、不登校生徒同士

25) 高江洲義英・入江茂編 『芸術療法実践講座3 コラージュ療法・造形療法』 岩崎学術出版 2004年 109-122頁。

の絆が形成され、彼らと学校をつなぐ「社会的な絆」を強化し、再登校や教室復帰に役立つと考えられる。

謝 辞

ご協力頂きましたZ中学校の先生方、不登校支援協力員の方に、この場をお借りして心より深謝いたします。

VIII. 引用文献

- 1) 現代教育研究会 『不登校に関する実態調査—平成5年度不登校生徒追跡調査報告書』 文部科学省 2001年。
- 2) Ginott, H. Group psychotherapy with children. New York : McGraw-Hill, 1961 (H. ジノット 中村悦子訳 『児童集団心理療法』 新書館 1965年)。
- 3) 霜田静志・北見芳雄・篠崎忠男 『集団分析：人間育成のための集団療法』 誠信書房 1963年。
- 4) 杉浦京子 『コラージュ療法』 川島書店 2005年。
- 5) Slavson, S. R. An introduction to group therapy. New York: The Commonwealth Fund and Harvard University Press, 1943 (S. R. スラヴソン 小川太郎・山根清道 (訳) 『集団心理療法入門』 誠信書房 1956年)。
- 6) 高江洲義英・入江茂編 『芸術療法実践講座3 コラージュ療法・造形療法』 岩崎学術出版 2004年。
- 7) 永田泰弘・三ツ塚由貴子著 『よくわかる色彩の科学』 ナツメ社 2007年。
- 8) Hirschi, T. Causes of Delinquency, University of California Press, 1969 (T. ハーシィ 森田洋司・清水新二 (監訳) 『非行の原因：家庭・学校・社会へのつながりを求めて』 文化書房博文社 1995年)。
- 9) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究（第1報）—登校を渋った経験，時期および原因について—」 『関西大学心理相談室紀要』 第3号 2002年。
- 10) 日高なぎさ 「健常者を対象にした不登校の研究（第2報）—不登校にならなかった要因について—」 『関西大学心理相談室紀要』 第4号 2003年。
- 11) 福岡市教育センター教育相談室編 『体験活動を重視した適応指導教室の実践的研究：不登校に関する実践研究』 1999年。
- 12) 星野良一 『補完・代替医療 芸術療法』 金芳堂 2006年。

- 13) 森田洋司 『『不登校』現象の社会学』 学文社 2005年。
- 14) 森谷寛之, 杉浦京子他編 『コラージュ療法入門』 創元社 2004年。
- 15) 安原青兒 『福祉のための芸術療法の考え方—絵画療法を中心に—』 大学教育出版 2006年。